



説教要旨「神の前に等しく」

エレミヤ書 31章 27～34節

隣人でありながら、兄弟でありながら、手を取り合えず、お互いがお互いを裁き合う。そんな苦しみを預言者エレミヤは嫌というほど味わいました。

エレミヤは、主に立ち返らなければ滅びしかないとユダの人々に訴えましたが、ユダの人々は聞く耳を持ちません。他の（自称）預言者たちは「神の民であるイスラエルは、神に守られているから大丈夫だ」と楽観的な言葉を語り、エレミヤの言葉を偽の預言として退けようとしていました。隣人どうし、兄弟どうしで「主を知れ」と言い合って、わかり合えない。相手が身近であればあるほど、その分かり合えないときの苦しみは増していきます。預言者エレミヤはそうした苦しみの中、偽預言者として捕らえられ投獄されることとなります。そんな苦しみの中にあるエレミヤに臨んだ主の言葉が、ここに記されているみ言葉です。

イスラエルは、そしてユダは、神さまに背いたために滅びます。それはかつて主なる神がイスラエルと交わした契約の破綻です。イスラエルの民が神との間に誓ったその契約を破ったからです。けれども神様が、その破綻した契約の代わりに、新しい契約を結んでくださる日が来るというのです。その時には、神様はそのみ言葉を、わたしたちの心の中に直接刻み込んでくださいます。そうなれば、もはやわたしたちはお互いに「主を知れ」と裁き合う必要がなくなります。自分の心にだけのことではなくて、相手の心にも神のみ言葉が刻み込まれるからです。エレミヤは将来、神様がわたしたちとの関係を修復して下さったあかつきには、隣人どうし、兄弟同士でいがみ合わなくてよい時代が来るのだと、国を失い失意のなかにある人々に告げたのです。

わたしたちは自分の中に、“正しさ”を持ち合わせていません。わたしたちは神さまの前に等しく、愚かで罪深いものです。そんなわたしたちは、新しい契約を立てるために神から遣わされた救い主、イエス様が十字架へと歩む姿を見つめる中で、互いに裁き合うのではなく、互いに仕え合い、愛し合う者へと作りかえられるのです。